

女性教職員活躍事例集Ⅱ

～管理職への道のりと伝えたいメッセージ～



室蘭市立星蘭中学校 坂本 教頭

Q お伝えしたいメッセージをお願いします！

「教員としての5年後、10年後が、今と同じ立場や環境のはずがない」と私は言われてきましたが、そうであれば「5年後、10年後、自分はもうどうありたいのか？」それを描きながら、また、周囲から期待されていることを意識していくことで、きっと力が蓄えられていくと思います。

そして「あなたの力が必要だ」と求められた時は、是非、管理職になって力を発揮して欲しいと思います。

Q 管理職を志した理由やきっかけは？

教務主任を務めたことが、管理職を志すきっかけでした。

学級担任にとってもやりがいを持っていましたが、当時の校長先生から「私自身の強みや適性を、学校全体に活かすように」とおっしゃっていただき、自分の力を認めていただいて嬉しくもありましたので違った視点で教育について考えることも、いい経験になるだろうと思いました。

Q 管理職になって気づいたことは？

学級担任として意識したことは、「生徒の良さや強みを担任が把握して、それを組織として活用して、その結果、生徒が学級のために生き生きと活躍できること」でしたが、この根本は、教職員が生き生きと働ける環境づくりにおいても変わらないことなどに気づきました。

Q 管理職のやりがいや魅力は？

一番感じていることは、視野が広がること。教頭になってからは、今の教育に求められている様々な内容などを学び、視野を広げる、チェンジすることができ、新たなやりがいを見つけることができました。

もう一つ感じていることは、管理職は人間性がとても試されること。自分自身に知識や経験の蓄えがないと、様々な相談や物事に対する対応ができません。それを補うために幅広く学ぶようにしていますが、その結果、教頭というよりも人間的に成長できる。それも管理職の魅力だと思います。

Q 管理職になるために必要だった支援は？

家族の協力と子どもの成長が、後押ししたと思います。

私は急に管理職を目指したのではなく、教務主任を経て管理職を目指す考えに至るまで2～3年を要しましたが、その間、「今後、教員としてこのように過ごしていきたい」という私のビジョンは、家族と共有していましたので、お互い支え合って家族として理解して進めたことが、とても心強い支援になりました。

Q 後輩教職員へのメッセージは？

ミドルリーダーを任されるということは、それだけ期待されているということなので、自分に自信を持って欲しいと思いますし、ミドルリーダーがビジョンを管理職に伝え、積極的に学校経営に参画して欲しいと思っています。

Q 管理職として子育てを始める職員に対し気をつけていることは？

子育てで大変な時は期間限定であることと、周囲の人には「申し訳ない」という気持ちよりも「感謝」の気持ちを大切にし、それを周囲に伝えて欲しいと思います。

管理職になった今、職員が子育てで困った時に、みんなでサポートするあたたかい職員室を作ることが、私の恩返しと考えています。

Q ご自身が子育てをしている時に支えとなった管理職のサポートは？

娘の幼少期に、当時の校長先生から「先生の代わりは他の人でもできるけれど、母親は唯一の存在。あなたしかいないのだから仕事のことは心配せず、お子さんに寄り添ってあげなさい」と言っていただきました。

その言葉にとっても安心したのと同時に、いい意味で「家庭・子育て」と「仕事」を割り切ることができました。

次ページからインタビューの全文を掲載しております！是非御覧ください！

1・管理職を志した理由やきっかけを、お聞かせください。

教務主任を務めたことが、管理職を志すきっかけでした。
学級担任にとってもやりがいを持っていましたので、担任業から外れ教務主任を任されることは、正直、想定外でした。

しかし、当時の校長先生から「私自身の強みや適性を、学校全体に活かすように」とおっしゃっていただき、自分の力を認めていただいているということは嬉しくもありましたので、今後、教員人生を続けていく中で、違った視点で教育について考えることも、いい経験になるだろうと思いました。

実際に教務主任をした時は、当時の教頭先生から様々なアドバイスをいただき、担任時代には考えられなかった視点の持ち方などを学び、面白さを感じました。

また、胆振公立小中・特別支援学校女性管理職「いちいの会」に参加させていただく機会を得て、女性の発想を活かした魅力的な研修内容や、その会に所属し活動している管理職の先生方のパワフルな活動の様子に刺激を受け、憧れましたね。

2・管理職になるために必要だった支援は、どのようなことですか？

家族の協力と子どもの成長が、後押ししたと思います。
私は急に管理職を目指したのではなく、教務主任を経て管理職を目指す考えに至るまで2～3年を要しました。その間、徐々にステップアップを踏みながら仕事量も増えていきましたが、「今後、教員としてこのように過ごしていきたい」という私のビジョンは、家族と共有していました。

私が忙しくなる分だけ家族の協力が必要となりますが、ビジョンの共有により、お互い支え合って家族として理解して進めたことが、とても心強い支援になりました。

娘は忙しい母親の背中を見て育ってきましたが、私が生きがいを持って仕事をしている様子を娘もわかっていたので、「私ができることは家の手伝い。頑張るから」と話す(当時)高校生の娘の成長に、これでよかったなと思っていますし、娘にとってはこのような生活に徐々に慣れていったことが、とても大事だったと思います。

3・管理職になって気づいたことは、どのようなことですか？

根本は、学級担任と変わらないということに気づきました。
私が学級担任として意識したことは、「生徒の良さや強みを担任が掌握して、それを組織として活用して、その結果、生徒が学級のために生き生きと活躍できること」でしたが、教頭になってからは、「担任時代と同じ視点を持つことの大切さ」を実感しています。教職員が生き生きと働ける環境づくりが、より良い学校に繋がっていくと思いますので、「学級担任として持っていた視点は、管理職になっても変わらない」ことに気づきました。

もう一つ気づいたことがあります。

管理職になると「授業をしないので寂しい」とか「子どもと接する機会が減る」という話を耳にしますが、私はまだ教頭の経験が浅いですが、そういうことを感じたことはなく、むしろ「学校課題を解決するためには、どのような授業が必要か？」という別の視点で先生方の授業を参観し考えることは今までになかったので、新たな視点で授業づくりに関われることは興味深いと思っています。

また、全校生徒に声をかけることが今の立場では求められ、全校生徒のことを理解するためには、先生方と生徒について積極的に情報共有することが必要になりますので、生徒と接する機会が減ったという感じは、まったくありません。

教頭職についてのイメージは自分なりにありましたが、「自分が持っていたイメージとは違うな。やはり自分自身が教頭になって感じないとダメなんだな」ということに、あらためて気づきました。

4・管理職のやりがいや魅力を、お聞かせください。

一番感じていることは、視野が広がることです。

学級経営や教科指導については、今までたくさん学んできましたが、日本の教育を支えている根本や今の教育に求められている様々な内容を、私はあまり理解していなくて、教頭になってからは自分の知識不足にとっても慌てました。

その不足を補うために関係文書や資料を読んで学びましたが、今の日本の教育に求められている方向性について見えてきて、視野を広げる、視野をチェンジすることができ、新たなやりがいを見つけることができましたし、経験値も少し上がったと感じています。

もう一つ感じていることは、管理職は人間性がとても試されるということです。

自分自身に知識や経験の蓄えがないと、日々、様々な相談や物事に対するバラエティーに富んだ対応ができません。それを補うためには教育関連だけではなく、様々な知識や能力を自主的に得ようとするのが求められますので、私も幅広く学ぶようにしていますし、その結果、教頭というよりも人間的に成長できる。それも私は、管理職の魅力だと思います。

教頭になって迎える4月から5月は、特に様々なことを相談されますが、「わかりません」という言葉は職員の不安に繋がるので言えません。そのことをとても実感したので、これまで以上に世の中で起きていることをニュースで見ようになりましたし、自己啓発など精神的な強さを身につけるための本を読んだりして、今まであまり目を向けてこなかった事に対して世界を広げるように努めています。

もし、教頭になっていなかったら、きっと自分自身にこのような投資はしていなかったと思います。

5・後輩教職員へのメッセージを、お聞かせください。

期待されているからこそ、任される。

ミドルリーダーを任されるということは、それだけ期待されているということ。自分に自信を持って欲しいと思います。

ミドルリーダーが中心となって動いている学校は、生き生きとしていると思いますので、管理職としては、ミドルリーダーが積極的に動かしている学校にしなければならぬと考えます。そのためには、ミドルリーダーがビジョンを管理職に伝え、積極的に学校経営に参画して欲しいと思っています。

6・子育てを始める職員に対して、管理職として、どのようなことに気をつけていますか？

経験上、伝えたいことが2点あります。

1点目は、子育てで大変な時は期間限定であること。

2点目は、周囲の人には「申し訳ない」という気持ちよりも、「感謝」の気持ちを大切に、それを周囲に伝えて欲しいということ。

私は東北地方の出身ですが、娘が幼少の頃、どうしても夫婦だけでは子育てが難しい時は、交通費を負担して実家から親に来てもらい、両親の手を借りました。友人が手伝ってくれたことも多々ありました。

また、今のような働き方改革が進む前でしたので、娘を職員室に連れて行って仕事をすることも多々ありましたが、そのような時は職員のみなさんが誰も嫌な顔をせずに、私の状況を理解して娘の面倒をみてくれましたので、私も「ありがとうございます。後で必ず恩返しをします」という気持ちでいました。そのように手伝っていただいたからこそ普段の仕事は絶対に手を抜かず、一生懸命取り組まなければならないと常に意識していました。

「普段の頑張りが認められていれば、お互い様という気持ちが必要自分を助けるんだ」という空気は、自然に職員室に生まれてくると思いますし、管理職になった今、職員が子育てで困った時に、みんなでサポートするあたらしい職員室を作ることが、私の恩返しと考えています。

少し余談になりますが、娘を職員室に連れてきて仕事をしていた時、こんな忙しい母親で申し訳ないと思って「ごめんね」と話をしたら、「職員室でお絵書きしていると、周りの先生にかまってもらえるから楽しいんだよ」とか、「校長先生に校長室においでと言われて行くと、美味しいキャラメルがもらえるから嬉しいんだよ」と、娘は言うんです。いい思い出になっているのかなと思うこともありましたが、忙しい母親の姿を見せていたことが、後に娘も「家族に協力しなくては」という気持ちに繋がったのかなと思います。

【6続き】

本校にも子育て中の職員がいます。

お子さんのことで急に休まなければならない時や学校行事で休む時は、「仕事は大丈夫だから、お子さんのところに行って」と言えるような職場の雰囲気になっていますし、私も自分の経験から「遠慮しないで、心配しないで、まずお子さんのところへ行きなさい、行っていいんだから」と話をしています。

その時は「すみません」とか「申し訳ありません」という言葉ではなく、「助けていただいて、ありがとうございます。次の時は、私、頑張ります」と話す方が、職場の雰囲気がとても良くなると感じますね。

7・ご自身が子育てをしている時に、管理職から、どのようなサポートが支えになりましたか？

娘の幼少期は、急な発熱や体調不良、子どもの学校行事への参加などで職場を欠席することが多く、学級担任や授業に支障が出ることもありましたが、そのような時に当時の校長先生から「先生の代わりは他の人でもできるけれど、母親は唯一の存在。あなたしかいないのだから仕事のことは心配せず、お子さんに寄り添ってあげなさい」と言っていただきました。

その言葉にとっても安心したのと同時に、いい意味で「家庭・子育て」と「仕事」を割り切ることができました。

8・インタビューの最後となりますが、お伝えしたいメッセージはありますか？

私は管理職の先生方に恵まれていたと思います。

教師としてのアドバイスや、人の生き方についても様々なアドバイスをいただきました。

「教員としての5年後、10年後が、今と同じ立場や環境のはずがない」と私は言われてきましたが、そうであれば「5年後、10年後、自分はどうありたいのか？」それを描きながら、また、周囲から期待されていることを意識していくことで、きっと力が蓄えられていくと思います。

そして「あなたの力が必要だ」と求められた時は、是非、管理職になって力を発揮して欲しいと思います。

[インタビュー実施月:令和4年3月]

インタビューにご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。